

去る3月20日に幹事会をウェブ開催し(13名参加)、毎年6月に開催してきました総会は、眼下のコロナ感染症の状況に鑑み、昨年に引き続き中止とすることを決定しました。会員間の懇親を深める機会がコロナ禍で失われているのは誠に残念です。状況が許すようになりましたら、幅広い世代の参加を募って総会を開催し、参加者全員が均等に発言の機会を得て懇親を深めることを目指したいと考えております。

会議では岩瀬幹事長より事務局の外部委託について報告されました。これまで本会は、事務局業務と「関東良陵だより」の編集を高橋慎一郎氏個人にお願いしてきました。会の継続性を考慮して、外部委託を検討してきましたが、複数の業者の比較検討を行い、「株式会社同窓会事務局」に業務を委託することにしました。「だより」の編集は、あと2回は高橋氏に依頼しますが、その後には委託業者が担当します。なお、会計業務については、引き続き岩瀬幹事長が担当していきます。

「だより」の内容についても意見交換を行い今回の発行に反映させました。リレーエッセイは今回で2回目となり、大津敦先生に最先端のがん研究と診療についてご紹介いただきました。これからも男女交互にリレーして行くことにしています。新たに群馬大学に薬理学教授として着任された川辺浩志先生には、教室の紹介をお願いしました。また、腫瘍内科医から、現在はアストラゼネカ日本研究開発本部長に就任された大津智子先生にも執筆をお願いしました。さらに「仙台のおもひで」と題する新たなシリーズを立ち上げ、第1回は川名陽子先生に食に関する思い出情報

を提供していただきました。今後も、若手の会員が興味を持つ記事や、広く様々な立場の会員からの記事の掲載を推進していきたいと考えています。

同窓会のあり方についても様々な意見が出され、若手の参加を促すための方策などが話し合われました。幹事の女性比率を上げることが課題として挙げられています。また、様々な年代からの参加を促進するため各学年のまとめ役を選任することが提案されました。今後も会員の皆様のご協力のもと、会の更なる活性化に努めて参ります。

臨床医・治験医から製薬企業で学んだこと

大津智子(昭和59年卒・旧姓・小笠原)

アストラゼネカ株式会社 研究開発本部長

医師免許取得後、多くの先生方が臨床や研究機関で医学界に貢献しておられる中で、製薬企業で勤務しております私の経験を紹介させていただきます。

私は大学卒業後、総合病院での内科研修・国立がんセンターのレジデントを経て、1992年国立がん研究センター東病院の開設と同時に、血液・化学療法科のスタッフとなりました。そこで、製薬企業主導の新薬開発のための治験を、数多く経験することになりました。また、海外の学会等に参加することで、欧米では既に効果が検証され承認・使用が可能なのに、日本では承認されていない薬剤が多くあることを痛感しました。治験を通じて、製薬企業の海外本社に勤務している医師達とも会議等で知り合うことができましたが、日本では当時は社内医師がほとんどおらず、外資系企業でも海外本社と日本のアカデミアとの懸け橋が十分といえない状況でした。画期的な悪性腫瘍分野の薬剤(次頁に続く)

前頁より続く (大津智子先生原稿)

は外資系企業発のものが主でしたが、日本での開発は数年以上遅れていました。私自身、微力ながら、医学的必要性の高い薬剤の日本での開発を企業側から貢献したいと考え、1999年から製薬企業に勤務することになりました。既に20年以上製薬企業で勤務しておりますが、一貫して、悪性腫瘍分野の新薬の開発に従事することができております。また、時代が丁度、国際同時開発が可能になった時でしたので、やりがいを感じてきました。幸い、全国に病院時代に共同研究した先生方が上位の職責であり、新薬の審査をおこなうPMDA(医薬品医療機器総合機構)でも、最近では医師の審査官がおりますので、画期的な新薬を日本の医学界に届けるために、産・官・学共同作業をしていると感じます。一方で、私は外資系企業に勤務しておりますので、海外本社との社内会議では日本の医療に関しては本社に正しく



大津智子先生

伝え、日本で改善するべきところは、施設にフィードバックするように努めております。日本では基礎研究が強い、と以前から言われておりますが、日本の基礎研究を海外本社の基礎研究チームに橋渡しすることも、我々日本社社の責務と感じております。

現在の仕事を通じて、日本の医療を客観的視点で捉えることが多くなり、薬価の仕組みや、薬剤の品質・承認審査・添付文書の作成・薬剤の流通システム等、病院時代にはあまり関心なかった医学界に重要な不可欠な領域を知ることができました。医学部卒業後既に35年以上経ちましたが、今までの経験がすべて現職に生かされていると感じますし、サイエンス追究する職場に勤務している限りは、衰えた脳を最大限刺激し続ける所存です。同時に、最近では製薬企業で勤務する医師も多数おりますので、彼らの先輩として、医師のキャリアの一つのモデルになればと願っております。

関東良陵同窓会

入会のご挨拶

群馬大学医学部薬理学講座教授

川辺浩志 (平成8年卒)

令和二年十月一日に群馬大学医学部薬理学研究室に教授として着任いたしました川辺浩志と申します。まずは「関東良陵だより」で自己紹介の機会を与えてくださった飯野正光先生に感謝申し上げます。

私は平成八年に東北大学医学部を卒業しました。東北大学での教育を通じて、細胞外から細胞膜と細胞質を経て核へ情報が伝わるという細胞内情報伝達の生化学に大変興味を持ち、東北大学医学部を卒業した年に大阪大学の高井義美先生の生化学研究室の大学院に進学しました。大学院修了後、生化学的な考え方と遺伝学を組み合わせることで脳機能をどこまで理解できるのか挑戦するために、平成十四年からドイツ・ゲッチンゲンにあるマックスプランク実験医学研究所にNils Rose 教授の研究室の博士研究員として、後に同研究所で独立グループリーダーとして留学しました。留学中は、当時ほとんど注目されていなかった特異的ユビキチン化による神経

細胞発達の制御機構に関して研究を進めてまいりました。

ドイツでは研究と医学部生時代に良峻山の会で始めたロッククライミングを通じて多くの友人を作ることができました。こうした友人達とNils Rose 先生のおかげで充実した十五年間の留学生生活を過ごすことができ、彼らには感謝の言葉もありません。

平成二十九年に文科省の大型予算を獲得した関係で、ドイツから神戸大学と神戸医療産業都進機構に研究の場を移して、令和二年より群馬大学で研究室を立ち上げております。これまで群馬大学医学部キャンパスのある前橋市に住んだことはなかったのですが、前橋の街はコンパクトにまとまっており、物価も安く、素晴らしい住環境です。私が長年過ごしたゲッチンゲンに少し似たところがあり、落ち着いて深みのある研究を進めるにはもってこいの街です。研究室からは目の前に赤城山を、遠方には谷川岳を眺めることもできます。谷川岳は冬から春にかけて雪を被っており、その美しい姿を眺めると心が落ち着きます。



川辺浩志先生



落ち着いて深みのある研究に
励むスタッフの皆さん

いす。どうぞよろしくお願ひ申し上
げます。

略歴 川辺浩志先生
 平成八年 東北大学医学部
 卒業
 平成十二年 大阪大学大学院
 医学系研究科
 修了
 平成十四年 マックスプランク
 研究所に留學
 令和二年 群馬大学医学部
 薬理学講座教授

リレーエッセイ②

新しいがん医療開発の 歴史を垣間見て

国立がん研究センター東病院病院長

大津 敦 (昭和58年卒)

同級生の深津玲子先生よりご紹介を受けました。私は大学卒業後磐城共立病院(現いわき市医療センター)で初期研修を行った後、妻智子(昭和59年卒)とともに国立がんセンターのレジデント、その後1992年東病院



大津敦先生

開院時とともに赴任しました。以来30年間、米国短期留学以外は東病院で勤務し、主に新しいがん医薬品の開発試験や「IT」研究に従事し、2016年から病院長を拝命しております。東病院は新しいがん医療開発を国からのミッションとして受け、内視鏡ではESDやNBI、薬物ではS-1やロンサーフ、エンハーツなど最初の開発から世界的に普及するまでの経緯を傍らから垣間見、一部は中心的に経験してきました。いずれも紆余曲折が多々ありましたが、共通するのは開発成功には何よりも「パッション」を感じます。管理職就任後は、臨床研究中核、ゲノム医療中核、次世代医療機器連携拠点橋渡し研究支援機関などを取得し本格的な開発拠点の基盤整備を行い、ベンチャー育成プログラムやゲノムスクリーニングプラットフォーム(SCRUM-Japan)なども熱気あふれ

る先生方と構築しました。リキッドバイオプシーなどゲノム解析技術の進歩は目覚ましく、生検や採血で生体内のがんの遺伝子変化などがリアルタイムでわかるようになり、創薬や個別化治療開発研究に劇的変化をもたらしています。若い先生方の成長は予想を超え、NEJM、Lancet、Nature、Nature Medなどのトップジャーナルに次々と成果を報告しています。

2010年の独法化以降患者数も大幅に増えて、本年7月には遠方や通院治療中の患者さん向けに敷地内に民間ホテルもオープンし、「IT」機器を駆使した診療モニタリングも開始予定です。2年前から遠隔医療連携を結んでいる山形県鶴岡市立荘内病院と高速遠隔通信で体腔鏡手術画面をリアルタイムで共有し、まもなく同院での手術に当院で開発した「手術ナビゲーションシステム」を導入し当院外科学が画面を共有しながらサポートする体制を開始します。遠隔ロボット手術実施に向け新たな歴史を刻めることも心待ちにいます。

大学時代はほとんど軟式テニスの部活に明け暮れ、夫婦そろって全医体

新連載 第一回

仙台のおもひで

川名陽子（昭和51年卒）

で優勝できました。ともに診療に日夜追われていた時代に生まれ、祖父母を始め多くの方のサポートに育まれた二人の娘も無事に成長し、弘前大学に進んだ長女が軟式テニス部に入学した時は大学合格時以上に喜びました。以降東医体の応援に6年間軽井沢に旅行するのが家の夏休み恒例行事でした。その娘も両親同様部活仲間と結婚し、長男が誕生して毎日のように孫の写真や動画が届き、翻ってわが身も定年間近となりましたが、今でも仙台で過ごした大学時代が一番懐かしく思い出されます。

時代は巡り、次は、新しい歴史を構築中の今井光穂先生にご登場いただきます。

略歴 大津敦先生

1983年東北大学卒業後、磐城共立病院初期研修、国立がんセンター病院（築地）レジデントを経て1992年より同東病院（柏）消化器内科勤務。2008年より同先端医療開発センター長、2016年より東院長就任し現在に至る。

AMED革新のがん医療実用化

研究事業プログラムオフィサー兼務

この度、新企画の第1回目という重責をお引き受けすることになりました。

さていただいたお題は「仙台のおもひで」ところが、改めて50年以上昔を思い出しても2010年入学は学園紛争の真ただ中。東大入試がなかった次の年、仙台にも学生運動の波が来て入学式は中止。まだ新幹線は通っておらず、1特急ひばりで上野仙台が3時間58分という時代です。あまりに『昔』話すぎて若い会員と分かち合える話題などあるかどうか？考えてみましたが、年を重ねるとともに食べるのが大好きなことを再認識。舌の記憶なら共有できるかもしれません。

食べ物の味は、誰とどんな時に食べたのかを時空を超えて思い出させてくれます。今のようにコンビニはない時代、東京から急に一人暮らしを始め、決められた予算の中で食事を作ることも何もかも初めてのことだらけでした。飲んだことのないコーヒーもお

酒もすべて仙台から始まります。今こそ有名になってきている牛タンも先輩が連れて行ってくださった、細い横町をはいったところの麦とろ牛タンしかない当時唯一の？店が初めてでしたっけ。

美味しいものの思い出の中でも、今でも思い出して食べたいと思うものがいくつもあります。その一つが賣茶翁の和菓子。もともと和菓子が大好きでお茶を習ったくらいでしたが、この『のんこう』という真っ黒なお菓子は衝撃的でした。それとお雛様の時期にだけ売っていた『ひぢぎり』の可愛らしさ。もう一つは今でこそ珍しくない餅（求肥）入りどら焼きのこだまのどら焼き。それに九重本舗の晒よし飴（今は小ぶりな霜ばしらという名前でも売られている珍しい飴菓）食事系では石巻栗野の笹かまぼこ、大学病院のそばにあった支倉のハンバーグ（現在ハセクラとして息子さんが継がれているようです）。どれも学生にはちよつと贅沢なので、何か特別な時に食べました。半世紀経ってもまだそのお店があり、同じものが売られていると知ると嬉しくなります。仙台を離

れて40年以上たち、趣味は日本酒を飲みながらお鮓を食べること、と言っても良いくらい、夫婦そろって鮓好き酒好きです。当時東京ではなかなか食べられない生のぼたん海老の握りを初めていただいた時の衝撃は忘れられません。残念なことに若い時にはお鮓をカウンターで食べるなどという贅沢は殆どできませんでしたが、コロナが落ちついてまた仙台に行かれる時には、是非美味しいお鮓を、と思うこの頃です。

*年会費五千円を同封の振込み用紙により、ご納入をお願い致します。同封した用紙の使用でATMからの振込料は無料。現金での振込料は手数料百円となります。（会計担当幹事）

東北大学長陵同窓会
関東連合会 東京支部

〒121-10831

東京都足立区舎人

三・十一・二十六

株式会社 同窓会事務局

TEL: 0120-10-9899 (区線172)

FAX: 0120-10-9184